

証言

戦争

「屋根に登って様子を
見ていた父が飛び下りて
きて、『今日の空襲はい
つもと違う。逃げる用意
を』と指示しました。表
に出ると見たこともない
数のB29が、煙のあいだ
から次からへ次へと現れ
て、かなたに去っていき
ました」

東京都葛飾区の亀井静
夫さん(81)は1945
年3月10日の「東京大空
襲」のことを鮮明に覚え
ています。

ススだらけの顔

「家の前の通りは、墨
田区の方から逃げてきた
れられて都電の花電車

東京都葛飾区
亀井 静夫さん(81)



た道すじにありました。
「3〜4歳のころ、真
珠湾攻撃が起き、兄に連
れられて都電の花電車を

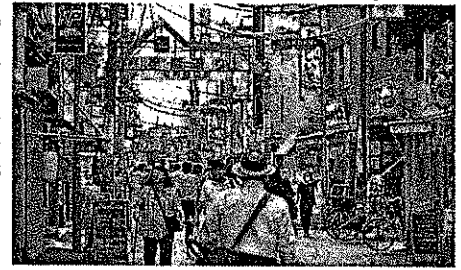
人であふれました。あんなに大勢の人たちが逃げ
てくるのを見たのは初め
てです。顔をススだらけ
にし、煙のほっていな
い方を目指して足を引き
ずっていく姿が、心に刻
まれました」

亀井さんは36年に、現
在の北千住駅東口(足立
区)にある商店街に、5
人きょうだいの次男とし
て生まれました。商店街
は、墨田区に続く「墨堤
通り」から東武線を渡っ
た道すじにありました。

東京大空襲・疎開・戦後の食糧不足

子らに同じ思いさせない

現在の商店街
東京都足立区



見にいった記憶がありま
す。攻撃を祝って、花を
飾った電車を走らせたの
です」

44年の秋、東京の空に
は飛行機雲を引いてB29
が飛ぶようになりまし
た。畳屋を営んでいた父
は強制疎開の作業に駆り
出され、北千住第4小学
校の校庭には供出された
鉄くずの山ができ、戦時
色はますます濃くなっ
ていました。

45年になると、空襲は
昼夜を問わず頻繁に。そ
のたびに、防空壕(ごう)
に入るよう警防団が点検
していました。警防団は
もう女性や退役軍人ばか
りでした。

「大空襲の翌々日、父
の自転車のうしろに乗っ

て墨田公園に行きまし
た。真っ黒な遺体を集め
て、焼いていたのを覚え
ています」

亀井さんの家の周囲も
空襲を受けました。足立
区によれば、44年11月か
ら始まった空襲は106
回に及び、千住地域は一
部を除きほぼ焼失。約1
万8000戸以上が焼失
し、約6万5000人以
上の区民が被災しまし
た。

家から駅丸見え

亀井さんは45年4月、
兄とともに長野県に集団
疎開。終戦後の11月に帰
京しました。空襲と強制
疎開によって、家からは
常磐線南千住駅が丸見え
で、何もありませんでし
た。

「両親は血の出るよう
な苦勞をして3食たべさ
せようとしてくれました
が、昭和21年(46年)は
かりは無理でした」

家族は一つの部屋に布
団を並べて寝ていまし
た。子どもが寝たのを見
はからうように、父と母
が布団の中で、明日の食
料や紙くずになった戦時
国債、新円交換による貯

金凍結について、「どう
したらいいだろう」とホ
ソボンと話し始めるのが
聞こえました。

戦時国債は、現在のA
4用紙ほどの大きさで、
何十枚も購入していまし
た。父は戦時中、畳屋の
仕事はほとんどなく、強
制疎開の作業も無給でし
たが、町会で半ば強制的
に買わされるので断れま
せんでした。

父と一緒に、上野の地
下道を見に行ったことが
ありました。現在の京成
電鉄と地下鉄銀座線を結
ぶ地下通路の周辺です。
家を失った人や戦争孤児
が、そこで生活していま
した。

地下道には、異様な臭
いが立ち込めていまし
た。亀井さんは当時を振
り返りながら、こう強調
しました。

「何百何千か、見当も
つかない人たちが毛布に
くるまっています。多
くは子どもでした。息絶
えている人もいました。
あんな思いを、絶対に子
どもたちにさせてはいけ
ないと、その後の人生を
歩んでいます」

(岡本あゆ)